

倫理委員会セッション

社会に役立つ原子力であるために ～原子力学会の倫理規程と実際の行動～
Nuclear Power Useful for the Society: Nuclear Academic Society's Code of Ethics and Behavior

(2) "社会に役立つ原子力技術の追求（行動指針第2条）"とは

～1F 事故を踏まえて～

(2) Pursuit of Nuclear Technology Useful for the Society: understanding the AESJ's Code of Conduct, Article 2 -lessons learned from the 1F accident-

*大橋 智樹¹

¹宮城学院女子大学

1. 東日本大震災のこと

宮城県山元町立中浜小学校は、避難マニュアルに定められた避難場所では津波到達まで間に合わないと判断し、地域住民を合わせて約 90 人が校舎屋上に避難した。津波は屋上直前まで到達したが、かろうじて屋上を超えることはなく、全員無事だった。石巻市立雄勝小学校では、地域住民とともに約 150 人が校庭に避難していた。児童を引き取りに来た保護者から大規模な引き波を指摘された後にあらかじめマニュアルで定められていた山の神社へ避難。その後さらに山を登り、全員が助かった。石巻市立谷川小学校では、地域住民とともに約 70 人が校庭に避難していた。消防団員二人が海の様子を監視し、津波の予兆を確認したのちに、マニュアルに従って県道まで避難。その後さらに山を登り、全員が助かった。

一方、南三陸防災庁舎では、職員 53 人が庁舎屋上に避難したものの、屋上を超える津波で 43 人が死亡した。七十七銀行女川支店では、13 名の行員が屋上に避難したが、屋上を超える津波で 13 人全員が流され、12 人が死亡した。石巻市立大川小学校では、地域住民合わせて約 100 人を超える人々が、市職員が避難を呼びかけていた河川堤防に向かって避難を開始した直後に襲来した陸上遡上津波によってほぼ全員が死亡した。

東日本大震災では、このように生死が分かれた例は枚挙にいとまがない。原子力事業は、再稼働を本格化させるこの時期に、原子力関係者は、これらの事例から何を学ぶべきだろうか。

2. 生死を分けたものは何か？

生還と悲劇を分けたものは何か。生還事例は成功なのか。悲劇となった事例は失敗なのか。同じことは原子力事業にも当てはまる。福島第一は失敗事例で、福島第二、女川、東海第二は成功事例なのだろうか。結果はたしかに大きな差があった。しかし、結果には常に運がつきまとう。運良く何も起こらないこともあれば、運悪く犠牲が出ることもある。結果のみに基づいて技術を語るべきでないことは専門家ならば誰でも知っているはずだ。

3. たゆまぬ安全性の向上のために

たしかに、結果が重大であればあるほど社会は強く反応をするものだし、その責任を負う者は、社会の声に対応する責任がある。しかし、真に安全性の向上を目指すならば、事象の評価を結果の重大性のみに委ねてきた歴史からの脱却が必要だろう。技術的に言えば、たとえ結果が重大でも何一つ対策を変えなくて良いこともあるし、逆に、何事も起こらなくても対策をすべて見直す必要があるときがある。しかし、福島事故への対応はどうだっただろうか。過去のすべてを否定しなければ前に進めないと諦めていないか。

結果評価の代わりに採用すべきは、たとえば「プロセス評価」だろう。何がどうなっていたら良い状態と評価するのか、何がどうなっていたら悪いと評価するか、“物差しと基準”を明確にし、常にモニタリングし続けることによって、「結果が出る前の状態」の評価をし続ける。そして、これら一連の評価プロセスをステイクホルダーと共有し、広く意見を求めつつ、必要な改善を行う。それによって、結果のみによらない評価が可能になる。もちろん解はほかにもあるだろう。それを考えねばならない。

本学会の倫理規程、憲章、行動の手引きには、原子力に関わる者たちが行動に移されねばならないことがたくさん書かれている。たとえば2条「公衆の安全をすべてに優先させて」、行動原理「不断の努力とチャレンジ精神の醸成」「規制適合が目的化することへの戒め」。結果のみに基づく評価を甘んじて受け入れている現状はこれらの規程に反しないだろうか。

*Tomoki Ohashi¹

¹ Miyagi Gakuin Women's University